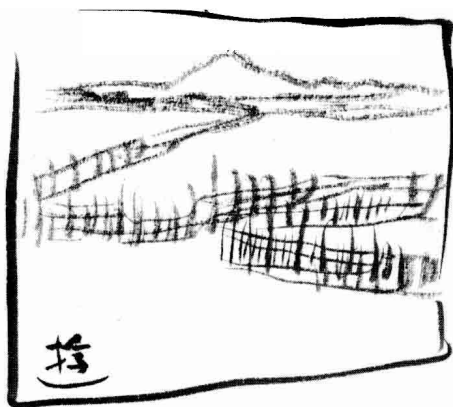


春の散歩

芝木好子

春の散歩

芝木好子



講談社

はる さんぽ
春の散歩

昭和六十一年二月二十日 第一刷発行

著者——しばきよしこ
芝木好子

© Yoshiko Shibaki 1986, Printed in Japan

発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—九〇—二三(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社

定価——一六〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えます。

目次

四季の眺め

菊坂七十番地

ある取材

湖北残雪

羽子板市

美味

愛犬たち

パリの散歩

荒れた海

パリの画家

26 24 22 20 18 16 14 12 10

舞台の密度

私の読書

追想

年の瀬

生きる

初釜

松の内

湯島の梅

雛の顔

華やぐ

襲名のたのしみ

上野の牡丹園へ

葛飾の菖蒲

28

30

32

34

36

39

42

45

47

51

53

57

61

東慶寺

薄暮の庭の白牡丹

私の嫌いなもの

小さな店

塗物碗

あのことろ

下町の粹

隅田川

本郷 上野界限 思い出の町

わが町

横町の散歩

あの頃の本

ヴェニスのおめ

64

66

70

72

74

77

80

83

86

93

96

98

102

春の散歩

105

眼の中

108

相聞歌

111

貝紫の帯

115

美とのふれあい

色合せ

122

ボストン美術館の能衣装展を観て

126

上野の杜

129

李朝のやきもの

134

美とのふれあい

139

江戸時代の櫛

145

日本の美

149

日本の色 藍を求めて

154

旅に想う

京都折々

168

東大寺落慶

173

近くて遠い国へ

178

故宮の陶磁

183

旅 シンガポール

187

スイスの山

193

北欧の旅

199

ブローニュの森で

204

貝紫の旅

208

旅ごころ

215

人の印象

パリの荻須画伯

220

三岸節子さんのアトリエ

224

ある夫婦像

228

彫刻を見る

232

野上弥生子先生

237

山の思い出

244

あとがき

250

春の散歩

四季の眺め

菊坂七十番地

本郷へゆき、久しぶりに菊坂七十番地を歩いた。樋口一葉の住んでいたあたりで、真砂町の台地の崖下にかけて段々に家が並び、端にほそい路地の伸びた一画である。路地のまんなかに共同井戸がある。今も明治のおもかげの残るなつかしい土地で、長屋門もある。一葉はここに住んで母と妹と三人で賃仕事をしながら中島歌子塾へ通うが、友達の三宅花圃に刺激されて、「小説というもの書かばや」と筆をとったのである。

ここへ来ると古い東京があつて、ものを書こうとする若い女のいる情景が見えてくる。細い石段を降りて、一葉が師の半井桃水に会いにゆく。歳月をとびこえて見えてくる場所などめったにあるものではないから、私は大切にして、何年に一度か来てみては確かめている。時には死者と語りあう。

数えて二十五歳で亡くなった一葉の幸せといえ、**「文学界」**の仲間が彼女の作品を高

く評価したことだろう。

婚期をすぎて、生きるための修羅もくぐりぬけて、晩年は中性のようなおもかげが見える。彼女の死病は奔馳性^{ほんち}の結核であった。見舞にきた馬場孤蝶が、「この暮れにまた来ます」というと、一葉は高熱にあえぎながら、「その時分私はなんになっていましょう。石にでもなっていましようか」と答えたという。「たけくらべ」「うらむらさき」などの佳篇を思い合せながら、菊坂の路地を去りかねたことだった。

（昭和五十六年十二月十四日・朝日新聞）

ある取材

小説の取材で未知の人に会いにゆくと、いろいろな経験をするものである。

三岸好太郎は大正十三年に二十一歳で春陽会賞を受けた逸材で、その後独立美術協会の創立に加わった画家である。彼は三十一歳で夭折したが、新しい絵を次々と描いた人で、調べてゆくとエピソードも多い。S画伯も当時の独立の野獣主義（フォービズム）の画家で、友人であった。

S画伯に取材にゆくと、昔語りにバリ時代佐伯祐三とつれ立ってヴラマンクを訪れた話を始めた。それはとぎれることなく続くので私は内心あわてながら、「ところで、三岸好太郎氏は」と口をはさんだ。好太郎は終生バリにあこがれながら望みを果さなかった画家である。S画伯は一言二言好太郎にふれるが、すぐ回想のバリへ戻ってしまう。「あのう、好太郎氏は」と私はあせる。不幸なことに私とS画伯とは歯車が合なかった。

「あなたは私の話を聞こうとしない」

と画家はきげんを悪くした。私は途方にくれて、間もなく辞去した。

あのとき取材などというけちな見を、なぜ私はすっぱりと捨ててしまわなかったのだろう。老画家の昔話に心ゆくまでつきあって、耳を傾けなかったのだろう。今にしてそう思う。しかしその時は三岸好太郎しか私の内に存在しなかったのである。S画伯は先頃亡くなった。八十五歳と聞いた。

（昭和五十六年十二月十五日・朝日新聞）

湖北残雪

友達の染織工芸家が個展を開いて、すばらしい織物を見せてくれた。

その中に「湖北残雪」と題のついたきものがあって、私は心を奪われた。両袖を開いた形に飾られた一枚の衣装は、肩のあたりが白く、だんだんと藍色と織り分けながら、裾へゆくほど藍が濃くなってゆく。間に枯れ草の金茶色が入って、玲瓏とした出来映えは一枚の絵のようであった。

染織家は琵琶湖の北へ雪をたずねて、きびしい冬景色と澄んだ湖水の青さに胸を打たれたという。糸を紡ぎ、藍甕を建てて藍色に染め、金茶は楊梅の木皮を煮出して染めた。

心象世界を追って機をたて、二カ月で織り上げたと聞いた。もったいない気がしたし、優雅な衣装が似合うとも思わなかったが、彼女が心を傾けて創りあげた豊かで繊細なイメージを、私は知らぬ間に抱きしめていた。